

《白れんげ》

作・的野節子

配役

緒方朋子（55歳）

辻 望美（55歳）

S・E 掃除機の音にかき消されるように鳴る

電話の音

望美「もしもし、エッ！朋子、久しぶり、何年ぶりかしら。

今ニュースで東京は大雨って言ってるけど、大丈夫？」

朋子「相変わらず元気ね。急に思い立って今九州に来てるの。それでね、どうしても会いたくなってね…。」

望美「今どこにいるの？」

朋子「つい田舎がなつかしくなって、博多を通りこして人吉まで来てしまったの。今ホテルにチェックインしたところよ。」

望美「おどろいた。それでいつまで…。」

朋子「うーん…たぶん二、三日…。」

望美「そう、じゃあ明日の急行球磨川で行くから待ってて。

温泉にでもつかって、話でもしようよ。」

朋子「うれしい、それじゃ人吉駅で待ってるわ。どうしても行きたい所があるの、楽しみにしてる…。」

S・E ベーンと、べんとー(駅弁売りの声)

望美「なっつかしかー、あの声は聞くと、かえったごたるきがするとよ。」

朋子「いやだ！球磨弁になってるよ。急いで、一番ホウムよ。」

S・E ピイー 発車

望美「湯前線に乗るの何年ぶりかしら。高校に通学してた頃が昨日の事みたい。朋子よく遅刻してたよね。手をあげて電車を止めて乗り込んだのあなた位よ。」

朋子「必死だったのよ。これに乗り遅れると期末テスト受けられないって。」

望美「ビートルズを聴いて夜ふかししてたんでしょ？」

朋子「そう、そうなのよ。あの時代だからこそあり得たことだよ。おぼえてる？春になると一面のれんげが咲いて、紫のじゅうたんの上を走ってる感じがしたよね。」

望美「そういえば、白れんげ探しながら一駅歩いてかえったっけ。うふふ朋子、蜂に顔を刺されてお岩さんみたいになつて大変だったよね。」

朋子「夢中だったの。白れんげは、願いをかなえてくれるって言うでしょう。」

S・E ポーン ポーン(テニスラリーの音)

望美「このテニスコート、今でも私達の血と汗が染みこんでるって気がしない？」

朋子「あの頃確かに全てをかけるものがあつたのよね。」

望美「だからこそ、何があつても立ちむかえる、そう思わない！」

朋子「実は…私…乳ガンなの。それも進行してて、左の乳房全摘だつて。女としてのすべてをなくすようで、さみしくて、こわくて、今の自分から逃げだしたい、忘れたいつてもがいていたの。」

望美「…わかつてたよ。昨日、良一さんから電話があつて、どうか話し相手になつてやって下さいってね。」

朋子「そうだったの…心配かけてごめんね…(涙声で)」

望美「ねえ朋子、お互いに子供たちも手を離れたことだし、これからは自分の時間をもっと大事にしてもいいんじゃない。」

朋子「自分の時間？」

望美「そう、あなたらしい生き方、第二の青春が始まるのよ。何だかワクワクしてこない！」

朋子「そうだ、来年の春、れんげ草の咲く頃もう一度来ない。白れんげ探して歩こうよ。」

望美「いいねー それまでに一駅歩けるように体きたえておくわ、朋子もがんばってね。」

朋子「わー 空があんなに青い。」

望美「ほんと！ふるさとの空に勝るものなしね。(笑いあう二人)」

S・E ポーン ポーン(テニスラリーの音)